

喜光寺の本堂、阿弥陀如来像、南大門

喜光寺の最も重要な宝物は2つあり、本堂とその中に安置されている木造の阿弥陀如来像である。どちらも重要文化財である。

現在の本堂は1544年に再建された。700年代に建てられた創建当初の本堂は、その45年前、100年にわたる動乱の時代に破壊されていた。このお堂は、奈良で最も有名なお寺のひとつである東大寺の大仏殿に似ており、関連している可能性があることで注目されている。喜光寺の創建者である行基という僧侶は、東大寺の創建に深く関わっていた。寺の言い伝えによれば、喜光寺の創建時の本堂は東大寺大仏殿の原型になったという。

本尊は平安時代にまで遡る木造の阿弥陀如来像である。穏やかな表情と流れるような衣装は、この時代の有名な仏師である定朝（1057年没）の流れを汲む仏師によって彫られている。坐像の高さは2.33メートルで、正統に定められた仏像の高さを保っている。阿弥陀如来像の両脇には脇侍である観音菩薩像と勢至菩薩像が安置されている。

南大門

本堂と同様に、創建当初の南大門もまた1570年代に破壊された。この門がようやく復元さ

れたのは 2010 年で、写経の推進を通じて集まった資金によって再建された。高さ 12 メートルの門の両脇には、著名な彫刻家である中村晋也（1926 年生まれ）が制作した 2 体の仁王像がある。仁王像は、門をくぐる人の心を清めると考えられている。